

日中学術交流講演会参加記

井竿, 富雄
九州大学大学院法学研究科博士後期課程

山田, 良介
九州大学大学院法学研究科修士課程

<https://doi.org/10.15017/16348>

出版情報 : 政治研究. 42, pp.101-105, 1995-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン :
権利関係 :



参加記

日中学術交流講演会参加記

井竿富雄／山田良介

一九九四年一月三日午後三時より、九州大学法学部大會議室において、九州大学法学部政治史研究室主催・九州大学法学部国際交流基金後援による、「日中学術交流講演会」が開催された。本講演会では、中国黒竜江省社会科学学院副院長・同院日本研究センター主任である歩平氏による、「中国東北地方と毒ガス部隊」と題する日本語による講演が行われた。

歩平氏はまず、黒竜江省と日本との関係から説き起こし、黒竜江省を含む中国東北部と日本との関係は、唐代に栄えた渤海国との関係に溯ることができると述べ、特に福岡との関係で言えば、大宰府があったために渤海国の使節が博多に上陸していたことをあげた。

つづけて歩平氏は、自身の専攻は中露関係史であったが、一九八六年から中国の黒竜江・吉林・遼寧の三つの省の歴史

研究所が共同で「東北地方淪陥史」、すなわち中国東北地方の日本占領時代の研究を始めたことをきっかけにして、当時黒竜江省歴史研究所所長であった氏が日本語を独学してこの分野の研究に入ったと、自己のこれまでの経緯を紹介した。

そして歩平氏は中国東北地方、特に黒竜江省については日本この地方への農業移民二七万人のうち三分の二が黒竜江省に入植していたことをあげた。氏によると、このような背景をもつゆえに、中国東北地方の人々が今なお日本の侵略に関して鋭い意識をもっているという。アヘン戦争以来日本をも含む帝国主義諸国の侵略を受けてきたがゆえに中国国民は自らを被害者であり、日本人すべてが加害者であると考えるが、しかしながら侵略の問題は複雑な側面をもつものであり、研究者としては、元日本人農業移民である中国残留孤児や中国残留婦人の問題も考慮に入れなければならないと歩平氏は述べた。ここで氏らが黒竜江省方正県で実地調査を行ったときに撮影された、同地にある日本人移民の墓地や現在生存している残留孤児・残留婦人の写真からなるスライドが映された。氏は、自身も戦後生まれなので戦争は書物の中でしか知らなかったが、実地調査によって戦争への認識が深まったと

語り、また農業移民としてやってきた日本人は、日本における貧しさゆえに中国東北部へやってきたことも考え合わせれば「被害者」であると述べた。

次に歩平氏は、日本と中国東北部との間のもう一つの問題であり、この講演のタイトルでもある毒ガスの問題に入った。

氏は、日本は現在世界で禁止されている「ABC兵器」（核、生物、化学兵器）のすべてに、それぞれ原爆、今年（一九九四年）全国で展覧会が催された「七三一部隊」、そしてこの毒ガスという形で関係していたと語った。氏は、中国でもこの化学兵器の問題についてはよく分かっていることなどについて、日本軍が遺棄した毒ガス弾が発見されていることなどについて触れ、あわせて黒竜江省ハルビン市北方の孫呉県の日本の中国侵略に関する陳列館にある毒ガス弾、そして一九五〇年代に中国政府が遺棄された毒ガス弾を山中に埋蔵処理したことを示す書類などをスライドで紹介した。

そして歩平氏は、調査に日本の研究者を加えることにより、日本の史料などを入手することができたと語った。氏によれば、日本軍と毒ガスとの関係については、陸軍科学研究所の存在、そして一九二七年広島県大久野島に毒ガス工場が建設

されたことが分かっているが、この毒ガス工場で働いていた元労働者の服部忠氏の回想録により、生産された毒ガスはさらに他の場所で砲弾に充填された後、大連へ運ばれハルビンへへてチチハルにある関東軍の毒ガス部隊であった五一六部隊に運ばれていたことが明らかになったという。この五一六部隊について氏は、隊長は陸軍科学研究所から、隊員は陸軍習志野学校から派遣されていたと述べた。そして氏らのチチハルでの数度の調査にもかかわらず判明しなかった五一六部隊の跡地が、元隊員の回想録によって明らかになったことを、当時の衛兵詰め所跡や五一六部隊の建物の基礎がそのまま使われているといわれるガラス工場、五一六部隊に隣接し、毒ガス弾を迫撃砲に装着して撃つ実験をしていたといわれる五二五部隊の跡地の写真のスライドを交えながら説明した。

さらに歩平氏は、毒ガス弾投棄地点ではないかと目されている嫩江大橋の写真のスライドを用いて、以下のように述べた。敗戦前夜の一九四五年八月一日、五一六部隊がその所有する毒ガス弾をチチハルを流れる嫩江に投棄した。それは嫩江大橋の上からであったといわれているがはつきりしない。また、チチハルでは毒ガス弾は発見されなかったが別の

地方で毒ガス弾と被害者が発見された。

ここで歩平氏は、松花江岸にある黒竜江省ジャムス市で発見された毒ガス弾とそれによる被害者について話した。氏の語るところによると、一九七四年一〇月二〇日夜、ジャムス港建設のための浚渫作業中、浚渫船が泥と一緒に毒ガス弾を吸い込み故障し、このとき吸い込まれた毒ガス弾の弾頭が破損したため、浚渫船の修理にあつた労働者四人に液化した毒ガス(後にこの毒ガスはイペリットであることが判明した)を含んだ泥水がかかった。彼らは不快感を訴えたが地元病院では原因が分からず、加えて水泡が現れたりしたため、ハルビン医科大学、さらに瀋陽の解放軍の病院へ運ばれた。ここで入院の結果一時的に中毒症状は軽快したもののすぐに悪化し、のちに北京の解放軍の病院で治療を受けたにもかかわらず、二〇年を経た今日も毒ガスの後遺症が消えていないという。またここで歩平氏は、労働者本人のみならずその家族も毒ガスによる皮膚症状などが現れているということなどを、毒ガス弾発見現場、そして被害に遭つた労働者の中毒症の現れた患部の写真などからなるスライドを交えて語り、現在中国全土にどのくらい毒ガス弾が残されているか明確に

は分からないが、今までにジャムス港だけでもいくつかの毒ガス弾が発見されていると付け加えた。

つづけて歩平氏は、中華人民共和国建国直後に中国政府が行つた毒ガス弾の埋蔵処理について語つた。氏らが中国側の文献を調査したところによると、日本の敗戦に続いて国共内戦が起こつたため、中国政府はようやく一九五〇年代初頭に日本軍が遺棄した毒ガス弾の処理を開始したが、その当時毒ガスを無害化処理することは技術的に困難だつたため、人里離れた場所に埋蔵処理するしかなかったという。さらに、遺棄された砲弾から、毒ガス弾を選別(その表面にガスの種類に応じて色がつけられているため識別可能)した後、毒ガス弾は木箱に詰められ、吉林省敦化市郊外の哈爾巴嶺山中に掘られた巨大な穴に埋められたという。また氏は、これまでに一九五三年、一九五四年、一九五七年の三度にわたつて埋蔵処理が行われたこと、敗戦直後には遺棄された毒ガス弾を現地住民が傷つけたために液化した毒ガスに触れ、ついには労働能力を喪失するに至るような事故があつたということを、氏らが現地調査を行つたときの埋蔵処理場所の写真や、敗戦直後の遺棄毒ガス弾による事故の被害者の写真からなるスラ

イドを映しつつ語った。氏によれば、中国におけるこの種の毒ガス事故で起きる症状は、大久野島の毒ガス工場の労働者にも発生しており、本人のみならず家族にも中毒症状が及ぶということも同じであるとのことである。

歩平氏はこれに加えて、中国東北部の他の地方でも毒ガス弾は発見され、被害者も出ていると述べた。その例として氏は、黒竜江省牡丹江市において毒ガスボンベが発見され、発見者が毒ガスと知らずに破壊したため多くの被害者が出たことを、牡丹江市と吉林省東豊県を調査したときのスライドを交えながら紹介した。

最後に歩平氏は、一九九五年は戦後五〇年である、中国人のみならず日本人も戦争についてしっかりとした認識をもつてほしい、自分は戦争に反対するためにも、歴史を皆にきちんと認識してもらわねばならないと考えていると述べて、講演を締めくくった。

今回の講演会は、中国東北部における日本関東軍の毒ガス部隊の問題を、その所在地での実地調査と中国側の文献検索を行いつつ研究している研究者の講演ということで極めて貴

重な機会であった。しかも現地で撮影された写真から作成されたスライドが講演の中で用いられたことも、理解の促進に役立った。この日は事前に新聞報道がなされていたこともあって、研究者のみならず一般市民の方々や全く専攻を異にする方々も聴講されていたため、このような視覚に訴える方法が取られたことは、歩平氏が講演の最後に強調された、多くの人々に今回のテーマとして扱われた問題について認識をしてもらうということについては成功であったといえよう。

さらに、今回の講演は、旧日本軍の化学兵器が残した様々な問題をわれわれに提示した。現在もおお多くの毒ガス弾が未処理のまま放置されているという事実、埋蔵処理された毒ガス弾から毒ガスが流出した場合の汚染に対する懸念、そして毒ガス被害者に対する治療と補償の問題など、今なお半世紀も前の戦争が深刻な傷跡を残しており、その早急な解決が必要であることを痛感させられた。また歩平氏が五一六部隊の問題を語るに先立ち、中国残留婦人や中国残留孤児の問題に触れて、彼らもまた貧しさゆえに中国にわたり、そして敗戦で帰国できなくなつたという点では、日本の中国侵略の被害者であつたと語つたことには深い感銘を覚えた。

以上のように歩平氏は、実地調査でなければなしえないような毒ガス部隊についての多くの貴重な調査結果を発表されたが、さらに踏み込んでいただきたかった点もある。まず、旧日本軍は中国戦線で実際に毒ガスを使用したといわれるが、五一六部隊はどのような作戦に従事したのか、また戦場における毒ガスの被害者はどの程度あったのか、という点である。そして五一六部隊・陸軍科学研究所・陸軍習志野学校が、旧日本陸軍の中でどのような地位におかれていたのか、すなわち毒ガス兵器がどの程度重要と見なされていたか、そしてさらに毒ガスを用いることは、日本の戦争遂行や対外政策の形成とどのようにかかわっていたのかという問題、また歩平氏は大久野島で製造された毒ガスが他の地方で砲弾に充填されたと述べられたが、具体的にはどこであったか（福岡には一九三七年にそのための機関として「陸軍造兵廠曾根製造所」が創設されている）などについても触れていただければありがたいかと思う。

しかし、これらの問題のかんりの部分は、本来、当事者で

あった日本の研究者が扱わなければならないものである。今回の講演で触れたことは、実は戦後五〇年にして、日本の研究者に向けて歩平氏が突き付けた重い問いかけであったことを忘れてはならない。歩平氏が述べたように、日本は戦争を通じて、前述の「ABC兵器」のすべてに何らかの形がかかわっている。この事実を、歴史の検証を通じて、平和研究などの分野で今後何らかの形で生かせるように努力していく必要があるとも思われる。

末筆ながら、前日別の場所で講演会がありお疲れであったにもかかわらず、今回の講演を引き受けてくださった歩平氏、この講演の企画を提案し、当日は司会を務めてくださった山口女子大学の岩下明裕氏、今回の講演会に際しスライド用に貴重な写真を提供され、当日の講演会にも参加して下さった写真家の相馬一成氏、そして所属・専攻を越えて出席して下さった教官、院生、学生、そして市民の皆様、心からお礼申し上げます。